

平成29年度 自己評価計画書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】 中高一貫教育の特長を生かし、高い進路目標に向かって邁進する生徒を育て、その実現を図る。

具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	達 成 度 判 断 基 準	判 定 基 準	備 考
① 校外模試等の結果を教科会や学年会で分析し、生徒にフィードバックするとともに、1ランク上の志望を持たせることにより学習意欲と学力の向上を図る。	進路指導課 教務課 各教科 各学年	昨年度の1, 2年生1月進研記述模試の3教科全国偏差値60以上の生徒は、1年生 105名 (30.3%) 2年生 73名 (24.0%) 昨年度の3年生10月進研記述模試の5教科文系全国偏差値56以上と5教科理系全国偏差値54以上の合計人数は、85名 (28.1%)  大学見学や難関大説明会、進路講演会などの取り組みにより、難関大を目指す生徒は増加傾向にある。  ※難関大 北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、一橋大、東工大、神戸大	【成果指標】 校外模試において、上位者（全国偏差値が1, 2年60以上、3年56以上または54以上）の数が増える。  【成果指標】 1, 2年生で難関大を志望する生徒数が安定して 東大・京大志望 10名以上 難関大学志望 40名以上 金沢大学志望 180名以上 国公立大学志望 280名以上である。	1, 2年生校外模試の3教科全国偏差値60以上の生徒が A 30%以上である B 25%以上である C 20%以上である D 20%未満である  3年10月記述模試で5教科全国偏差値が文系で56以上、理系で54以上の現役生徒が A 35% (110人)以上である B 29% (90人)以上である C 23% (70人)以上である D 23% (70人)未満である  1, 2年生で難関大を志望する生徒が A 55名以上である B 45名以上である C 30名以上である D 30名未満である	C、Dの場合、教科・学年ごとに結果を分析し、改善策を検討する。  C、Dの場合、取り組みを再検討する。	模試結果の分析により評価する。  進路志望調査（4月・1月）により評価する。
② 難関大学を中心とした高い進路志望の実現のため、入試分析や補講・添削等のサポート体制を強化する。	進路指導課 第3学年	平成29年度入試では、難関大合格者が東大1名、京大2名を含め現役13名となり、過去最高であった平成27年度入試と肩を並べる結果となった。更なる高みを目指して、進路指導課と学年が一体となって、進路実現のためのサポート体制の強化を図る必要がある。  ※29年度入試結果 難関大合格数 16名（うち現役13名） 金沢大合格数 52名（うち現役45名）	【成果指標】 学力・学習状況の分析に基づくきめ細かな指導を行うことで、難関大学現役合格者数が増える。  難関大及び金沢大の現役合格者数が A 70名以上である B 50名以上である C 30名以上である D 30名未満である	東大・京大及び国公立医学科の現役合格者数が A 3名以上である B 2名である C 1名である D 0名である  難関大及び金沢大の現役合格者数が A 70名以上である B 50名以上である C 30名以上である D 30名未満である	C、Dの場合、サポート体制を見直し、改善策を検討する。	平成29年3月末の合格者数実績により評価する。
③ CU（土曜補習）、補習を通して、より意欲的な学習の在り方へと切り替えさせる取り組みを行う。	進路指導課 各学年 各教科	昨年度、「CUや補習は自分の学力向上に役立っている」と思う生徒は、全体の65%であった。常に内容の見直しを進めていく必要がある。	【満足度指標】 CUや補習が、生徒の学力向上に役立っている。	「CUや補習は自分の学力向上に役立っている」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。
④ 中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ、学級担任や学年主任、教科担任等による積極的な面談を行う。	教務課 各学年	昨年度、ホーム担任や教科担任との面談によって「より良い変化が生まれた」と答えた生徒は前期67%、後期72%であった。学習に関する悩みよりも学校生活に関する悩みへの対応について、肯定的評価がやや低い。ホーム担任のみならず組織的な対応が求められている。	【満足度指標】 面談を通して、生活や学習に関して、きめ細かく指導を行うことで、学習面での積極性が向上する。	「ホーム担任や教科担任との面談によって、自分の学習姿勢により良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合、指導のあり方を再検討する。	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。
⑤ 中高一貫教育校として6年間を見通した学習指導や進路指導を行う。	教務課 各教科	昨年度、「中高一貫教育校として、6年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に教科で取り組んでいる」と思う教員の割合は前期49%、後期60%であった。6年間を見通した教科指導・進路指導体制の確立に、いっそう努めなければならない。	【努力指標】 6年間を通して、到達目標を明確にし、中高の教員が連携して、学力のステップアップを図る。	「中高一貫教育校として、6年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に、教科で取り組んでいる」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、連携のあり方を再検討する。	職員アンケート（7月・12月）により評価する。

**【重点目標2】 教科指導の質的向上に努めるとともに、あらゆる教育活動を通して生徒の論理的思考力や表現力の伸長を図る。**

具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	達 成 度 判 断 基 準	判 定 基 準	備 考
① ICTの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業改善に取り組む、生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに、論理的思考力や表現力の育成を図る。また、各教科の特質を踏まえた言語活動を通して、「コミュニケーション力」の育成を図る。	教務課 各教科	昨年度後期の職員アンケートによれば、互見授業と錦丘中との交流において、各学期に3回以上「参考になった」と思う教員が47%であり、やや改善が見られたが、まだ十分ではない。	【努力指標】 錦丘中とも連携した研究授業や互見授業を通して、授業改善に繋げる機会を多く設ける。	「他の教員の授業を参観したり、自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が、錦丘中との交流を含め、年間4回以上あった」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	職員アンケート（7月・12月）により評価する。
		「ICTをよく活用している」「時々活用している」と答えた教員は、全体の77%で、前年度の59%を上回った。「ICTの活用＝プロジェクトの使用」と捉えるのではなく、タブレット端末を含めた活用内容の向上を追求したい。	【努力指標・満足度指標】 ICTの効果的な活用方法について学校全体で検討し、実践に繋げる。	「授業でICTをよく活用している」「時々活用している」教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	職員アンケート（7月・12月）により評価する。
				「ICTを活用した授業により、学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が A 65%以上である B 55%以上である C 45%以上である D 45%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	授業評価（7月・12月）により評価する。
		昨年度の授業評価によれば、授業の中に「論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある」という肯定的評価は、前期77%、後期78%であったが、目標には到達していない。	【満足度指標】 思考を揺さぶる学習活動を取り入れ、論理的思考力や判断力、表現力を育てるとともに、自ら課題に向き合い、考え抜く探究力を育てる場面が増える。	「授業の中に論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が A 85%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	授業評価（7月・12月）により評価する。
		授業にペアワークやグループ学習などが取り入れられるようになってきているが、他との意見の違いに触れながら、自分の考えや集団の考えを形成・発展させる場面の設定には、工夫が必要である。	【満足度指標】 グループ学習などの協働学習の手法を取り入れ、自らの考えを伝えるだけでなく、集団の考えをまとめられるようなコミュニケーション力を伸ばす場面が増える。	「授業の中に話し合いや発表などを通してコミュニケーション力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	授業評価（7月・12月）により評価する。
② 教科や総合的な学習の時間の内容を関連させ、表現トレーニング、プレゼンテーション、多文化共生理解などに取り組むことで、論理的・批判的に事象をとらえ、自らの考えを述べる力を育成する。	教務課 各学年 各教科	昨年度、「さまざまな世界的・社会的事象に対して、より関心を持つようになった」と思う生徒は、全体の58%であった。「おもてなし講座」や「錦丘ゼミ」など横断的な取り組みが増え、社会的事象に対する興味関心に繋がっている。	【成果指標】 さまざまな世界的・社会的事象により関心を持ち、それについて意見を持つような生徒が増える。	「さまざまな世界的・社会的事象に対して、より関心を持つようになった」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、指導のあり方を再検討する。	生徒アンケート（7月・12月）により評価する。
③ 高校の各年齢段階で求められる知識・教養・感性を身に付け、文章の理解力・表現力を育成するために、読書を奨励する。特に、各教科と連携し、読書指導を授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて行うことによって推進する。	図書課 各学年 各教科	昨年度、「授業で推薦図書を紹介するなど生徒の読書量を増やすための指導をした」と答えた教員は、全体の31%であった。『先生のお薦めの1冊』の取り組みの効果も少しずつ現れているようである。	【努力指標】 生徒が読書の楽しさを知り、高い教養と感性を身につけ、幅広い考え方ができるように図書の紹介を行い、生徒の読書に対する興味・関心を高める。	「授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて、生徒に適した書物を紹介し、読書量を増やすための指導をしている」教員の割合が A 50%以上である B 40%以上である C 30%以上である D 30%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	職員アンケート（7月・12月）により評価する。
		昨年度、図書館からの1人あたり平均貸出冊数は、1年生6.7冊、2年生5.8冊、3年生4.6冊で、全学年平均は5.8冊であった。ビブリオバトルなどの取り組みの効果も少しずつ現れているようである。	【成果指標】 図書館からの生徒1人あたりの年間貸出冊数が、目標の6冊以上に増える。	生徒1人あたりの貸出冊数が A 年間8冊以上である B 年間6冊以上8冊未満である C 4冊以上6冊未満である D 4冊未満である	C、Dの場合、課、学年、教科で読書指導のあり方を再検討する。	図書館カウンターバーコード集計により評価する。

具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
④学カスタンダードの到達目標の到達度をはかる問題作成を視野に置きながら、論理的思考力を高めるために必要な試験問題の作成について教科全体で検討する。	教務課 各教科	昨年度の定期試験では、どの教科も点数換算で10%以上は、思考力を問う問題が設定されている。問題作成者だけでなく、教科全体で作問について検討していきたい。	【努力指標】 定期試験において、論理的思考力を高めるための問題作成を計画的に行う。	年間を通して論理的思考力を問う問題の割合(点数換算)の平均値が A 15%以上である B 10%以上である C 5%以上である D 5%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	定期試験により評価する。

**【重点目標3】 学習、進路、生活、部活動等を有機的に結びつけ、より自立的内発的に取り組むことのできる、実践力のある生徒を育成する。**

具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
①中学校と連携しながら、三点固定(学習開始時間、就寝時間、起床時間の固定)を図り、生活リズムを自ら整える態度を身につけさせる。	生徒指導課	学校及び家庭における学習開始時間を固定するために、登校時間や下校時間を守らせる必要がある。昨年度の遅刻は理由のあるものも含め、一日平均7人であった。部活動終了後の下校時間を守ることができている生徒は84.2%であった。	【成果指標】 三点固定を図り、生活のリズムが整っている生徒が増える。	遅刻をする生徒は一日平均で A 5人未満である B 6人未満である C 7人未満である D 7人以上である  「下校時間を守っている」生徒の割合が A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である	C、Dの場合、生徒に時間を厳守させるための指導のあり方を再検討する。	遅刻集計及び生徒アンケート(7月・12月)により評価する。
②家庭学習時間調査による生徒の自省や様々な視点からの学年集会及び講演等における示唆を通じて、学習意欲を高めるとともに、生活全般において自立的・内発的な行動をとることができるように働きかける。	教務課 各学年 各教科	後期の目標達成率は、 (平日) 全学年49.9% 1年58.0% 2年26.4% 3年65.4% (休日) 全学年37.3% 1年29.7% 2年29.0% 3年53.4% 1, 2年生の達成率を上げる必要がある。	【成果指標】 平日は、1年2時間、2年2時間30分、3年4時間。休日は、1、2年4時間、3年総体総文前5時間、総体総文後8時間の家庭学習時間を達成する生徒が増える。	目標時間を達成している生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	生徒アンケート(7月・12月)により評価する。
		昨年後期の職員アンケートでは、シラバスを「定期的に活用した」は61%で、その内訳は「単元ごとに活用」7%「定期試験ごとに活用」54%であった。生徒アンケートでは「シラバスを活用して計画的に学習」は11%であった。生徒の活用率が低い。	【努力指標】 シラバスを活用し、生徒の自立的・計画的な学習を促す。	「シラバスを定期的に活用した」教員の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である		
③部活動に所属している生徒の積極的な挨拶を核にして、生徒一人一人が自発的に挨拶できるような雰囲気を醸成し、気持ちよく授業を受けられる環境を整える。	生徒指導課 生徒会課	朝の挨拶運動には、35部活動中32部活動が参加し、生徒アンケートによると71%の生徒が積極的に挨拶をしていると回答している。しかし、「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」と回答している割合は24%に留まっている。	【成果指標】 生徒会執行部、総務委員会、生活・交通安全委員会及び部活動を中心に挨拶運動を企画・推進し、積極的に挨拶ができる生徒が増える。	「学校生活において、挨拶を積極的に行っている」生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	生徒アンケート(7月・12月)により評価する。
④部活動において、限られた時間を有効に活用させることによって、自主性自立性の育成と部活動の活性化を図る。	生徒会課 各学年	昨年度の部活動加入率(10月)は、 1年 男子 94% 女子 100% 2年 男子 93% 女子 90% 全体94.8%  部活動と学習の両立ができていると思う生徒(12月)は、 1年 57% 2年 55% 全体 55.6%	【成果指標・満足度指標】 年間を通して、高い部活動の加入率が維持される。  学習との両立ができ、心身のバランスがとれたタフな生徒が増える。	部活動加入率が A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である  1, 2年生で「部活動と学習の両立ができている」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	部登録調査(4月・10月)及び生徒アンケート(7月・12月)により評価する。

具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	達 成 度 判 断 基 準	判 定 基 準	備 考
⑤ 生徒会主催の行事を生徒が中心となって企画運営し、今後、社会人として求められる自主的自立的な態度や実践的な行動力を育成する。	生徒会課	昨年度、「各行事において、生徒の自主性を高める指導を行い、自主性は高まった」と職員が感じる割合は71%であり、生徒アンケートにおいて「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」と感じる生徒の割合は69%であった。しかし、職員・生徒ともに「やや当てはまる」という回答が多く（職員59%、生徒48%）、「当てはまる」という回答はまだ少ない。	【努力指標・満足度指標】 各行事において、生徒の自主性が育成されるよう教職員の共通理解を図る。各行事において、自主的に参加する生徒が増える。	「各行事において、生徒の自主性を高める指導を行い、自主性は高まった」と思う職員の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である  「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	職員アンケート・生徒アンケート（7月・12月）により評価する。
⑥ 学校、地域の環境美化に努め、活動に積極的に取り組むことで、環境ISO活動参画の推進と更なる環境保全に対する意識の向上を図る。	保健・相談課	啓蒙活動と美化委員によるゴミ分別活動が定着してきたことで、環境保全に対する意識は向上してきているが、ゴミの削減には繋がっていない。これまでに蓄積したデータと比較しながら、クラスごとにゴミの量を減らす方策を考えたい。	【成果指標】 美化委員による各クラスごとの計量活動に取り組み、個人ゴミの持ち帰り、リサイクルを呼びかけ、ゴミの量を減らしていく。	3月職員会議「ゴミ排出量&紙リサイクル量」の測定結果報告において、各クラスの年間のゴミ排出量が昨年の量と比較して A 5%以上の削減 B 3~5%の削減 C 0~2%の削減 D 増加	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	年度末のゴミ排出量の報告により評価する。
⑦ 担任、学年、生徒指導室、保健室、相談室、部顧問が十分に情報を共有し、課題や悩みを抱えた生徒を早期に発見し、自発的解決に向けて協力する。	保健・相談課 生徒指導課 各学年	学業・進路、家庭環境、友人関係などの悩みを抱え、不登校傾向を示す生徒が増加している。また、発達障害傾向があり、集団生活になじめない生徒も増えている。	【成果指標】 早期に連携して、生徒の課題や悩みに対応しよう意識する教員が増える。	「関係教職員の情報共有により、問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C、Dの場合、連携のあり方を再検討する。	職員アンケート（7月・12月）により評価する。
⑧ 学年通信や進路だより等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに、PTA活動や学校行事への参加拡大を図り、家庭との連携を強める。	総務課	保護者への情報提供として学年通信や進路だよりを定期的に発行しているが、PTA主催の行事が増えたこともあり、案内が十分でない場合がある。	【成果指標】 学年通信・進路だよりのほかにメール配信も有効に活用し、保護者が目にする機会が増える。	「学年通信や進路だより・行事案内など学校からの情報を見ている」保護者の割合が A 80%以上である B 75%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C、Dの場合、取り組みを再検討する。	保護者アンケート（7月・12月）により評価する。
			【成果指標】 行事に参加する保護者の数が増加し、延べで1,000人以上になる。	PTA主催の行事に参加する保護者の数が、延べで A 1,000人以上である B 800人以上である C 600人以上である D 600人未満である		